

民主主義・平和主義・社会主義

——日本共産主義運動史研究の最近の一〇年——

はじめに

田 中 真 人

ソ連邦の崩壊とソ連共産党の解散というドラスティックな展開のきっかけとなったクーデター未遂事件が発生したのは一九九一年八月であった。それからちょうど一年が経過した一九九二年八月、二つの注目すべき報道がなされた。その一つはNHKテレビの敗戦記念日特集「東京裁判への道」であり、他方は『週刊文春』での野坂参三に関わる一連の書簡の公表であった。前者では、日本共産党の天皇制廃止スローガンをめぐって、一九四六年一月に一六年の亡命生活から帰国した野坂参三の、これまでに明らかでなかった帰国ルート、ならびに対日戦後処理方針をめぐる米中ソ三連合国との関わりについて、後者では一九三〇年代にスターリンのもとで肅正された在ソ日本人共産主義者、なかんずく野坂みずから「刎頸の友」と語っていた山本懸蔵について、野坂自身が山本の告発者であったことを示す諸文書が明らかとなった。いずれも長い間、一般への公開を阻まれていたソ連邦とソ連共産党の文書庫から引き出されたものであり、その内容は、一〇〇歳となる野坂参三日本共産党名誉議長の共産党からの除名(一九九二年二月)を引き起こすなどの衝撃的な事態をともなした。そして旧ソ連邦において覆い隠されてきたコミンテルンと各国共産党、多くの共産主義者に関わる諸文書が、研究者によって探索しうる状態におかれ、さまざま条件の中から探し出したこれらの文書群に依拠した研究成果のいく

つかが発表されてきた。^②

筆者は、このような旧ソ連文書が日の目を見始めたころの一九九四年に『一九三〇年代日本共産党史論』(三一書房、以下、田中前著と略)を刊行し、その序章「日本共産主義運動史研究の現段階」において、それまでの研究史の整理を試みた。たとえばコミンテルンと日本共産党との関係については、村田陽一の編集による『コミンテルン資料集』全七巻(大月書店、一九七八―八五年)や『資料集 コミンテルンと日本』全三巻(大月書店、一九八六―八八年)といった大部の資料集がすでに日本語で刊行されていた。コミンテルンが発表した公式の文書、舞台の前面で展開された建前の文書は、その大要を日本語で読むことがすでにできていた。しかしながら一九九〇年代に発掘された世界は、いわばその舞台裏、壇上でスポットライトを浴びている共産主義運動の指導者としてではなく、共産主義運動にもおよんだ権謀術数と政治の世界の嵐の中で、翻弄され、もがく、それぞれの息づかいを感じさせるような人間の記録であった。新しい文書資料の発掘をともなったこの一〇年間の共産主義運動史は、しかしながら時勢を反映して必ずしも活発とはいえないが、拙著旧稿の研究史整理を引き継いだ、最近の一〇年を扱うその続編を試みたい。

- ① 旧ソ連文書庫と俗称されるこれら新たに公開された文書群のもっとも主要なものはツバ(TsBAPKSS ソ連共産党中央委員会アルヒーフ)と呼ばれていたものであり、これはルツヒドニ(RUKHIDNI ロシア現代史文書保管センター)と改称されたのち、現在はルガスビ(RGASPI ロシア国立社会政治史アルヒーフ)と呼ばれている。
- ② 旧ソ連文書館の文書を閲覧する体勢は、まだ一貫せず、かねてからの非効率なシステムとも相まって、とりわけ外国人研究者にとっては、労多きものとなっている。一九九一年末からモスクワに滞在する機会

を得た富田武は、系統的に旧ソ連文書を閲覧した最初の日本人研究者の一人である。富田の「モスクワ・アルヒーフ事情」(ナウカ「窓」第九二号、一九九五年三月)は、その実情を紹介した早い例であるが、その実態も刻々に変化している。こうした閲覧の体験談の比較的最近のものとして、島田顕「モスクワのコミンテルン資料——スペイン内戦関連文書の研究——」(『大原社会問題研究所雑誌』第五二五号、二〇〇二年八月)を挙げておく。

一 二〇世紀「戦争と革命の時代」？

歴史ブームは恒常的なのか、新刊書群の中に、歴史関係の叢書類は次から次へと登場している。こうした叢書のうちで社会運動史関係の論考にどの程度の比重が与えられているかを比較検討してみると、近年のこの分野の凋落ぶりがよく反映されている。

『日本の時代史』（吉川弘文館、二〇〇二～〇四年）は、全三〇巻のうち二〇世紀前半に三巻をあてているから決して近代の比重が少ないというわけではない。第二三巻『アジアの帝国主義国家』では小路田泰直「都市と農村」のなかで「都市社会主義という選択」として安部磯雄や社会政策学会の動きに触れるのみで、日露戦争の章では社会主義や非戦論をあつかった記述はない。第二四巻『大正社会と改造の潮流』（季武嘉也）では社会思潮としての「改造」、「デモクラシー」について冒頭の数ページで触れるのみである。第二五巻『大日本帝国の崩壊』（山室建徳）は映画、生活実相、技術といった内容が中心の章立てで社会運動についての独立の章はない。

歴史学研究会・日本史研究会共編の日本史の通史論集は、一九五〇年代以来、その第四次のシリーズが『日本史講座』全一〇巻として刊行された（東京大学出版会、二〇〇四～〇五年）。中江兆民・田中正造・田添鉄二を論じた小松裕「民権運動と社会主義」（第八巻『近代の成立』）と、賀川豊彦・大杉栄・山川均・高島素之をとりあげた安田浩「階級と解放——大正社会主義の諸相」（第九巻『近代の転換』）の二編が、社会運動、社会思想をあつかったものといえようか。

二〇〇三年から配本が始まった「ミネルヴァ評伝選」の既刊、ならびに予告において、取り上げられている二〇〇名もの日本史上の人物のうち、社会主義者としては『福本和夫』（伊藤晃執筆予定）ただひとりノミネートされているにすぎない。吉川弘文館の「人物叢書」との比較においてさえ、社会運動史関係の比重の低さが目立つ。

このころみに社会運動史研究全盛期とその余韻があったといえる第三次岩波講座『日本歴史』近代一～八（一九七五～七

七年)の各巻に収められた社会運動史関連の論文のタイトルと筆者を列挙すれば、江村栄一「自由民権運動とその思想」、松永昌三「社会問題の発生」、飛鳥井雅道「初期社会主義」、橋本哲哉「都市化と民衆運動」、二村一夫「労働者階級の状態と労働運動」、渡部徹「部落解放運動」、村上信彦「婦人問題と婦人解放運動」、岩村登志夫「無産政党的成立」、鹿野政直「大正デモクラシーの思想と文化」、岡本宏「労働運動の激化」、生松敬三「マルクス主義と知識人」、犬丸義一「反ファシズム運動とその解体」、粟屋憲太郎「国民動員と抵抗」と二三編を数える。

一九九〇年代以降の社会運動史研究の低調さと関心の低下が、近年の歴史関係叢書におけるその比重の低下を招来していることは自明であろう。「資本主義の全般的危機」「東風が西風を圧倒する」「世界史の発展法則の必然的進化」といったお題目は、この日本では社会主義体制の崩壊という事実の前にその生命力を絶たれ、「戦争と革命の時代」としての二〇世紀は、そのネガティブな側面を表すこととなった。

二〇〇三年一月、日本共産党は予告なしの唐突さでもって『日本共産党の八〇年』を発表した。この種の〈公式党史〉は一九六二年の『日本共産党の四〇年』以来、八回目の改訂であるが、前回のものよりも縮小された初めての事例となった。宮本党史としての完成形態といわれた前回の『日本共産党の七〇年』(一九九四年四月)が九〇万字を数えたのに対して、『日本共産党の八〇年』は二六六万字と、一気に三分の一の分量となった。その結章で、二〇世紀について次のような概括的評価が下されている。

「二十世紀の日本の最大の政治的变化は、『主権在君』の専制政治から『主権在民』の民主政治への転換でした。これは、日本の歴史上、画期的なできごとであり、『国民が主人公』という原則は、二十一世紀に生きる日本の大原則となりました。」(単行書版『日本共産党の八〇年』二〇〇三年、三三二ページ)

したがって党の創立や、現在の党綱領の確定についても次のような記述となっている。

「日本共産党の創立は、二十世紀に日本が、専制政治と対外侵略に反対し、主権在民と平和の実現をかかげる運動と政党をはじめ

て生み出した、歴史的なできごとでした。そして科学的社会主義の党の創立は、近代日本の社会進歩の伝統をうけつぎ、発展させるものとなりました。」（同前、一七ページ）

「一九六一年の第八回党大会で確立した綱領路線——当面の改革の課題を『資本主義の枠内での民主的改訂』とする路線は、その後の四十年余の歴史の試練にりっぱにたえただけでなく、二十一世紀のわが国の真の改革をさしめす方針として、現実政治と組みあつて、その力を發揮しています。」（同前、三二四ページ）

逆にロシア革命の世界史的意義については簡素な記述にとどめられ、コミンテルンの果たした役割は、積極的意味よりは「多数者革命否定論」「単一世界党」「社会民主主義敵論」の否定面が強調され、三二一テーゼにもこれらの否定面を色濃く反映されていることが、その積極面とともに強調されている。

二〇世紀の最大の変革が「主権在民」の実現であり、日本共産党としてのみずからの登場も「主権在民と平和の実現を掲げる運動と政党」が生み出されたことを意味するとし、それを継承して「資本主義の枠内での民主的改訂」の旗手として今日もあるというのが、現在の日本共産党がみずから定義づけているものである（にもかかわらずゴルバチョフの「新思考」は否定されるべきものとされ、イタリア共産党の「変質」を非難し、社会民主主義一般とみずからとを画しているという不思議な姿勢を保持しているが）。こうした現在の、みずからについての位置づけは「社会主義」を旨指した「戦争と革命の時代」としての二〇世紀の社会主義史の読み直しを必然化せざるをえない。

日本共産党のこうした動向に呼応したわけではないが、歴史研究、社会主義史研究において、二〇世紀を平和主義と民主主義の前進と達成という脈絡の中で読み直そうとする動きは、まず初期社会主義研究において先行している。たまたま二一世紀に入ってからには、日本で最初の社会主義政党である社会民主党の結成一〇〇年を迎え（二〇〇一年）、さらに日露非戦論の『平民新聞』と平民社の一〇〇周年（二〇〇三年）と続き、初期社会主義研究会を中心に、いくつかの記念行事が取り組まれた。^①

二〇〇三年秋には平民主社百年を記念して福岡県豊津町・大阪市・東京都・高知県中村市・熊本市において、初期社会主義研究会とその周辺の人々によって記念講演会などが開催された。このうち、一月一日の東京（早稲田大学）集会の記録が梅森直之編『帝国を撃て——平民主社一〇〇年記念シンポジウム——』（論創社、二〇〇五年）として刊行されている。東京の記念集会は、報告講演者がすべて外国人の若い研究者であったことに特色がある。グローバルゼーションが問題となっている昨今の思潮を反映して、キーワードは「世界からながめた平民主社」であった。オーストラリアのベンジャミン・ミドルトンは、いわゆる「発展段階」的史観への疑問を述べ、平民主社の時代と現代との同時性を強調した。ドイツのマイクルシユプロツテは、社会主義思想にも色濃く反映されている「ヨーロッパ中心主義」分析とそれへの批判を展開し、フランスのクリステイン・レヴィは「近代vs伝統」という二項対立的発想への理論的介入を試み、韓国の李京錫は社会主義思想に内包される儒教的普遍性と反近代的契機を指摘して平民主社研究における「欧米—アジア」の重点を逆転させる試論を行った。コーディネーターの梅森直之を始め、とくにミドルトン論文に顕著のように、論者に共通する発想は（初期社会主義の「前史」からの解放）ということであろうか。つまり初期社会主義の先駆性を評価しつつも、その「未熟さ」と「限界」を指摘し、本格的な労働者階級とその前衛が登場して、「科学的社会主義」の戦列が整うに至らない段階の「前史」として位置づける発想からの完全な決別であった。

初期社会主義を「前史」とする発想は、「本史」が厳然として存在するという認識を背景とする。一九一七年のロシア革命から資本主義の全般的危機が始まり、資本主義からの社会主義への世界史的移行の段階が開始され、その推進力として世界共産党・コミンテルと各国共産党が「前衛」としての戦列を整え、それは第二次大戦後において東欧やアジアへと広がって地球の三分の一の社会主義体制ができあがり「東風が西風を圧倒」していくというもので、おおよそ一九六〇年代ごろまで左翼の陣営にできあがっていた図式であった。その結果としての「果実」が、一九八九年の東欧革命から一九九一年のソ連崩壊という現実の中で破綻したとき、二〇世紀の社会主義を、その戦略・戦術の変遷ではなく、獲得した達

成物から見てもよという気運が登場することになった。『日本共産党の八〇年』は、それを主権在民原則の貫徹という、いわば民主主義の進展においた。「社会主義を経とし、民主主義を緯とし」、帝国主義の黎明期に軍備全廃と非戦を唱えた「平和主義」を貫いた一九〇一年の「社会民主党宣言」や平民社の主張は、こうしてあたためて評価軸が与えられることとなった。

よく知られているように平民社の『週刊平民新聞』創刊号（一九〇三年一月一日）第一面トップの「創刊の辞」の冒頭はフランス革命のスローガンである「自由・平等・博愛」を掲げていた。この現象は、平民社発行の絵はがきがマルクスやエンゲルスとならんでトルストイを取り上げていたこととならぶ、平民社の社会主義の「前史」性をあらわすものとしてしばしば語られてきた。いまやその「前史」性こそがポジティブな評価軸に移行しつつある。この間の、旧ソ連文書を利用した新研究のリーダーといえる一橋大学の加藤哲郎教授は社会主義理論学会二〇〇五年度総会の記念講演（二〇〇五年四月一九日）を「社会民主党宣言から日本国憲法へ」と題した（講演速記は『葦牙』第三一〇号二〇〇五年七月に掲載）。ここでは社会主義思想は、フランス革命の「自由・平等・博愛」のうち「平等」に重きを置いた広い思想的流れとしてとらえ直す必要が説かれた。また、マルクス以外にも空想的社会主義と呼ばれるいくつか、ブランキまで多様な流れがあったにもかかわらず、日本では、マルクス＝レーニン主義としての共産主義運動が社会主義を体現するものとされ、かつ社会主義の伝統が希薄であったために、社会主義体制の崩壊とともに社会主義は瀕死の葬送段階に入った点で、ヨーロッパと大きく様相を異にしているとの現状認識を示した。この点から平和主義・民主主義・社会主義をセットして打ち出した一九〇一年の「社会民主党宣言書」の再評価と、その主要部分は日本国憲法に体现されたという、二〇世紀の「達成物」を評価軸とする視点が強調されることとなるが、この点で加藤氏は『日本共産党の八〇年』が示した二〇世紀の概括の評価に近い立場を表明しているように思われる。

コミンテルンとそれとでの各国共産党（あるいはこれらよりもっと教条的側面を有していた日本の社会主義協会の流れ）は、

「帝國主義戦争の不可避性」とその「内乱への転化」による革命を指向したわけであるから、「平和主義」一般を語ることは絶対平和主義として否定されるべきものであり、そのことの結果として革命運動とは区別された独自の運動論理を有する平和運動の成り立つ余地を否定した^②。ブルジョア民主主義とのちがいが強調された「社会主義的民主主義」なるものと「プロレタリアート独裁」の結末が、いかに非民主主義的な実態であつたかは、すでに議論の余地はない。もつぱら「計画経済」の側面が強調された「社会主義」は、市場の経済法則を無視し、党権力の恣意を許したものととして否定される。

このようなコミンテルン型社会主義に対置されるものとして、加藤は前掲『葦牙』論文で、社会民主党宣言書とならび、新発掘の「一九二二年九月日本共産党創立綱領」、およびアメリカ戦略情報局(OSS)が、一九四二年段階ですでに作成していた、象徴天皇制を骨子とする「日本プラン」を、日本国憲法に連なるものとして再評価する。後者はひとまずおくとして、前者についていえば、一九二二年(実際には一九二三年頃)の日本共産党の創立綱領といわれるものをはじめ、日本共産党の戦前における綱領的文書は、一九二七年、三二年、三三年のテーゼなど、いずれもモスクワで作成されたものだった。これに対して一九三六年の野坂参三・山本懸蔵連名の「日本の共産主義者への手紙」は、三二テーゼのように天皇制が主敵でなく、ファシスト軍部であること、したがって社会大衆党や民政党の一部までも味方に引き入れねばならぬという大きな戦略的転化を示唆していた。この「手紙」を一九〇一年の「社会民主党宣言」の三大原理に連なる発想として再評価し、これに連なるものとして加藤は新発見の、一九二二年九月日本共産党創立綱領を紹介する。「デモクラシーを出来得るだけ徹底させる事は、プロレタリア運動の為に有利である」などのいくつかの文言が、平民社の流れののにおいを感じられると見たわけである。ちなみに加藤氏の考証では、この綱領の草案の起草者は山川均であつた。

① 初期社会主義研究会は会誌「初期社会主義研究」の第一三号(二〇〇〇年)を「社会民主党百年」、同第一六号(二〇〇三年)を「平民

社百年」として特集号を組んだ。また「社会民主党百年」資料刊行会編「社会主義の誕生」(論創社、二〇〇一年)、山泉進「平民社の時代

——非戦の源流——」（論創社、二〇〇三年）が記念出版として刊行された。田中真人・松尾章彦『日本最初の社会主義政党 社会民主主義 一〇〇年』（同志社大学人文科学研究所ブックレット、二〇〇一年）はこの間の記念行事の記録の一つである。また資料集『平民社百年コレクション』（全一三巻（論創社）の刊行が企画され、幸徳秋水・堺利

彦・安部磯雄にかかる三巻が二〇〇二年から二〇〇三年にかけて出版されたが、さまざまな事情で中断している。
② 共産主義運動と平和運動の論理的関係とその実態を考察した拙稿「日本反帝同盟の研究」（前掲、『一九三〇年代日本共産党史論』所収）を参照された。

二 旧ソ連文書を使用した新研究

前述のようにルツヒドニ（РУССКИНИ、ロシア現代史文書保存・研究センター）の文書の衝撃的な登場は、ルポライター小林峻一・加藤昭両氏によって『週刊文春』一九九二年九月三日号から十一月五日号までに連載された野坂参三に関わる文書であり、これは改訂増補のうえ『闇の男——野坂参三の百年』（文藝春秋、一九九三年一月）として単行本化された。同書には、野坂参三の、コミンテルン書記長デIMITロフへの山本告発の手紙をはじめ、山本の妻であった関マツのコミンテルン国際統制委員会における供述書、同除名決定書、肅清計画についての一九三七年七月のソ連共産党中央委員会での報告など、一九三七年から一九五〇年にいたる九点が「資料」として収録されている。

日本共産党も、当時の「名誉議長」であった野坂参三に関わるのみならず、日本共産党の歴史の根幹にふれる問題として重視し、独自にモスクワに調査員を派遣し、日本共産党に関係する文書の収集に努めた。その内容は不破哲三署名の「日本共産党に対する干渉と内通の記録」として日本共産党中央機関紙『赤旗』一九九三年一月一〇日から同年六月一六日まで、文書の解説と解釈を中心とした論説として一六五回にわたり連載されたのち、同名の単行本として刊行された（新日本出版社、一九九三年九月）。同書は、小林・加藤の『週刊文春』記事の内容を確認したのみならず、むしろ第二次大戦後の一九六〇年代に至るまで、日本共産党内に個別にソ連邦とソ連共産党に忠実な「ソ連派」形成工作を行ったその実態を、当事者の文書から明らかにした。

野坂参三は回顧録『風雪のあゆみ』全八巻をすでに著していた(新日本出版社、一九七一一八九年)。これは一六年の亡命生活を終えて日本に帰国した一九四六年初頭までの、野坂の百年にわたる生涯の前半生しか扱っていないが、それだけに全八巻は、個人の回顧録としてはボリュームとして大部なものに属する。そして今日では、この回顧録がどのような作為をもって書かれたか、功成り名を遂げて、その位置を保持した人物の晩年における自伝や回顧録が、その時点の立場から敷衍し、合理化して叙述されることがいかに多いかの代表事例とさえなっている。^①

『闇の男——野坂参三の百年』も、『干渉と内通の記録』も、日本共産党をめぐるきわめて生々しい現実政治の動きと密接に関わるかたちで論じられた。その内容において学術論文的クールさとは、やや異次元のトーンが含まれることはやむを得ないにしても、この初期に公刊された二著の「学術研究書」としてもっとも大きな欠落は、読者に使用した資料文書へのアプローチの手だてを保証していないことである。具体的には使用・引用した文書の文書番号が付されていない。

先に挙げた旧ソ連文書館であるルツヒドニとこれを継承するルガスビでは文書の大分類から小分類にいたる体系をそれぞれ「フォンド(文庫)、オーピシ(目録)、ジュエーラ(ファイル)、リスト(文書)」と呼び、それぞれに番号が付されている。したがって RISKIDNI, f. 17, op. 128, d. 698, l. 6 あるいは ロシア語表記 PRACTH, ф. 489, on. 1, r. 14, r. 122 などと脚注に付しておけば、当該文書に到達することは可能となる。旧ソ連文書館文書についてこのようにその文書番号を付して、読者に、筆者の依拠した資料へのアプローチを保証して、その検証を待つという、学術論文としての常道の体裁をとった最初のものは和田春樹「歴史としての野坂参三」(『思想』一九九四年三―五月号、大幅に書き換えられた同名の単行本あり。平凡社、一九九六年)であろう。

ただし一九九〇年代の中葉段階では、旧ソ連文書を閲覧するにはモスクワの同館に出かける以外に方法はなく、それゆえか、和田のように文書番号まで注記することは一般的とはいえなかった。旧ソ連文書の発掘と、これらに依拠した新研究を次々と発表して、この時期の研究の牽引的役割を果たしてきた加藤哲郎の一九九〇年代中葉に刊行された三著、す

なわち「三〇年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇」との副題をもつ『モスクワで肅正された日本人』（青木書店、一九四四年）、『国民国家のエルゴゴジ』（平凡社、一九四四年）、『人間 国崎定洞』（勁草書房、一九四五年、川上武と共著）は、いずれも旧ソ連文書を駆使したところに最大の特徴を有するものであるが、まだ文書番号までは付されていない。これらの著書が学術論文というよりも、より一般的な読者を想定し、期待されていたことも理由の一つであろうか。そして加藤が一九九〇年代後半以降に発表した一連の学術論文^③には、原則としてこれらの文書番号が付せられることとなった。

山内昭人『リウトヘルスとインターナショナル史研究』（ミネルヴァ書房、一九九六年）は、オランダの国際的というにふさわしい社会主義者にして、在米中の片山潜在に大きな影響を与えたリウトヘルスにつき、アムステルダムの国際社会史研究所のカウツキー文庫・スネーフリート文庫、アントワープのユイスマンズ文庫などの文献を、一九八〇年代以来博捜してきたものをまとめたものである。本書には旧ソ連文書はまだ活用されていないが、同書刊行後において、同書の内容を補強する旧ソ連文書の発掘を反映したいくつかの論文を山内は発表することとなる。とりわけ日本から事実上の亡命をした片山潜在が、アメリカ、あるいはメキシコに滞在中にどのようにしてコミンテルンと接触することになったのかにつき、モスクワで発見したアムステルダム・サブビューローの書記リウトヘルスと日本社会主義者との通信文書類、片山潜在のメキシコ滞在時の書簡および草稿類を紹介した。これらによれば、アムステルダム・サブビューロー解散後に南北アメリカにおける任務を引き継いだコミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーの議長に片山はずでなっており、サブビューローとエイジェンシーとのコミンテルン両下部組織の継承関係等を明らかにした。

この間、石川楨浩『中国共産党成立史』（岩波書店、二〇〇一年）が上梓されたが、中国の場合は崩壊した旧ソ連とは事情を異にして、なお資料の公開には壁が厚いようである。中ソ蜜月時代であった一九五六年から翌年にかけて、当時のソ連共産党中央から中国共産党に返還された「コミンテルン代表団アルヒーフ（中共駐共産国際代表団檔案）」にはコミンテルンと中共との往復文書二万点以上が含まれているといわれ、北京の中央檔案館に保管されているのだが「同檔案館は外国

人学者はもとより、自国学者にも門戸を閉ざし続けている」という実情にある（石川、同書、二二ページ）。石川のこの大著は、したがってこれらの文書をほとんど利用し得なかったが、この著の刊行の前後の一九九九年より石川・山内昭人・水野直樹ら有志による「初期コミンテルンと東アジア」研究会が組織され、同会は二〇〇二年から二〇〇四年にかけて科学研究費の交付を受けて、旧ソ連文書の収集とその利用に努めた。科研費報告書『初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究』（二〇〇五年）において、石川と水野は、旧ソ連文書を利用して、初期コミンテルン大会における中国・朝鮮代表の特定に関して、それぞれの旧稿を修正補足する論考を寄せている。^⑤

石川・山内・水野らのグループの前に和田春樹・富田武・水野らが一九九八～一九九九年にかけて科研費の交付を受け、報告書『ソ連共産党、コミンテルンと日本、朝鮮』（二〇〇〇年）を提出し、和田春樹・水野直樹・劉孝鐘「コミンテルンと朝鮮—コミンテルン文書に基づく若干の考察」『青丘学術論集』（韓国文化研究振興財団）第一八集（二〇〇一年）を発表している。いずれもモスクワに出かけて文書を複写するという基礎作業に多大な労力をかけたものであるが、二〇〇四年にいたり、これらのうち日本共産党に関連するファイル、すなわちRGASPIの font495、opis 127、file 1-616の部分が、マイクロフィルム一三二リールにして市販され、いくつかの研究機関が購入した。この部分については日本においても容易に閲覧が可能となった。^⑥ こうしてコミンテルン文書の公開と利用状況は、この一〇年間で大きく変化したわけである。^⑦

① 日本共産党は『戦前日本共産党幹部著作集』の一冊として『山本懸蔵集』を編集していた（新日本出版社、一九八六年）。野坂参三『風雪のあゆみ』を「今日のぞみうる山本に関する最良の解説」との書き出しで始まる同書の解題・解説（関幸夫執筆、約五〇ページ分について、大きく書き直された差し替え冊子（小林栄三執筆）が一九九二年末にあらためて配布された。

② ただし同一の分類の中に同種の文書が体系立った整理のもとに収められているという状態とはほど遠いようで、かなり異なった性格の諸

文書が同一分類の中に一緒に収納されていることも少なくないという。^③ モスクワの旧ソ連文書館の史料を使った加藤の一連の論文は、そのほとんどが『大原社会問題研究所雑誌』を発表の場とした。すなわち「モスクワで見つけた河上肇の手紙」（同誌、四八〇号、一九九八年一月）、「一九二二年九月の日本共産党綱領」（四八一～四八二号、一九九八年二月～一九九九年一月）、「第一次共産党のモスクワ報告書」（四八九・四九二号、一九九八年八月・十一月）、「非常時共産党」の真実——一九三二年のコミンテルン宛報告書——」（四九八号、

二〇〇〇年五月）がある。

④ 山内昭人「日本社会主義者とコミンテルン・阿姆斯特ダム・サフ・ビュローとの通信」〔大原社会問題研究所雑誌〕四九九号、二〇〇〇年六月、「在墨片山潜の書簡と草稿類、一九二二年」同、五〇六号、二〇〇一年一月、「片山潜、在米日本人社会主義者団と初期コミンテルン」同、五四四号、二〇〇四年三月、改稿されて科研費報告書「初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究」二〇〇五年、所収、「片山潜、在露日本人共産主義と初期コミンテルン」〔大原社会問題研究所雑誌〕第五五六号、二〇〇六年一月。

⑤ また富田武は「中国国民革命とモスクワ 一九二四—二七年——ロシア公文書館史料を手がかりに」『成蹊法学』第四九号（一九九九年三月）において、第一次国共合作期におけるソ連援助の実態などについて、新資料を利用した。このほか梶川伸一も「飢餓の革命 ロシア十月革命と農民」〔名古屋大学出版会、一九九七年〕、「ポリシエ エピキ権力と農民 戦時共産主義下の農民」〔ミネルヴァ書房、一九九八年〕から「幻想の革命 十月革命からネップへ」京都大学学術出版会、二〇〇四年）において、あらたに旧ソ連文書館の文書で資料の補強をした模様であるが、ロシアソ連史の具体的記述について、私には論評する力はない。

⑥ これらはオランダIDC書店の発売にかかると、ほかにコミンテルン第一回から第五回大会の関係文書、すなわちFond 488-492

三 戦後の日本共産主義運動を視野に

社会主義が現実の「体制」であることから大きく様相を異にしてくるとともに、各国における社会主義や共産主義を標榜してきた政治勢力の、とりわけみずから歴史に關わるスタンスにも変化が現れている。その小さな事例を加藤哲郎・

の部分も、同じ書店からマイクロフィッシュ化されて市販されている（Comintern Archives, 1917-1940; Congresses Leiden, Netherlands: IDC Publishers, 1994）。なお和田春樹・富田武は、日本共産党と日本に關連する主要文書につき、翻訳を付した書籍としての刊行を準備していると聞くが、二〇〇五年秋現在、まだ日の目を見ていない。その文書の一部は、富田武「コミンテルンと日本共産党——旧ソ連アルヒーフ資料から——」〔歴史評論〕二〇〇二年七月）で紹介されている。

⑦ 冷戦時代の対峙関係の遺産を引き継いだアメリカには、旧ソ連の文書庫の扉が開かれてから、もともと早期に、かつ大量にこれらの文書の複写物が持ち帰られた。Yale University Pressの『共産主義の記録（Annals of Communism）』シリーズの刊行は、その早い事例の一つである。このシリーズのうち邦訳が出版されている三冊をあげておく。L・T・リー、V・N・オレーグ、V・K・オレーグ編、岡田良之助・萩原直訳『スターリン極秘書簡・モロトフ宛 1925-1936』（大月書店、一九九六年）、スタインバーク、フルスタリーヨーフ編、河上洗訳『ロマーノフ王朝滅亡：革命期の政治の夢と個人の苦闘』（大月書店、一九九七年）、H・クレア、J・E・ヘインズ、F・I・フィルソフ著、渡部雅男・岡本和彦訳『アメリカ共産党とコミンテルン』（五月書房、二〇〇〇年）。

森宣雄・鳥山淳・国場幸太郎編『戦後初期沖縄解放運動資料集』の第三卷「沖縄非合法共産党と奄美・日本（一九四四―六三）」（不二出版、二〇〇五年五月）をめぐる動きに見てみよう。

沖縄の革新政党には軍政下以来、社会大衆党や、のちの社会党の流れのほかに沖縄人民党があり、人民党は沖縄の本土復帰とともに日本共産党に合流してその沖縄県委員会を構成し、人民党委員長であった瀬長亀次郎は日本共産党の複数の副委員長の一人となった。これらはよく知られた事実である。ところが一応の合法公然政党であった人民党とは別に、しかしメンバーのかなりは重複して、一九五〇年代前半において非合法の共産党が組織されていたことは、人民党や共産党関係者は長く沈黙、秘匿してきた。たとえば『瀬長亀次郎回想録』（新日本出版社、一九九一年）にも一切の言及はない。秘匿の理由は、現実が発足したときには米軍政下であったという政治状況のゆえであつたらうし、日本共産党の一九五〇年分裂問題の余波、人民党内の人脈の相違と対立などさまざまな要因が考えられるが、ここではそれについての考証が問題ではない。

今回の資料集の編者の森宣雄らは、これまで光を当ててこられなかった沖縄非合法共産党の実態を示す史料の発掘と収録につとめ、そのひとつとして敗戦直後から一〇年間の「日本共産党の沖縄対策」として、当時の『アカハタ』など本土の中央機関紙誌に掲載された方針書や論文のいくつかをこの資料集に再録することを計画した。その掲載につき現在の日本共産党中央委員会に許諾を求めたところ、条件付きで応諾すると返事がもたらされた。その条件の一つは、敗戦直後の日本共産党の沖縄論には「琉球独立論」など、すでに是正克服されている誤りがあり、その誤りと是正の事実を解説等でふれること、というものであった（同資料集、第三巻解題、一八ページ）。この対応は歓迎すべきものである。現在の日本共産党にとってはすでに解決済みと考えられているテーマを含むという余裕もあるだろうし、また『日本共産党の八〇年』以後の現在の日本共産党には、党史についての強い執着心が減退しているということが、みずからの過去についてのナーバスな対応から、今回のような余裕のある対応となつたのであろう。共産党についての学問的な研究さえも、きわめ

て政治的な対応をしてきたことのある同党の歴史から見れば、大きな、そして望ましい変化といえる。^{①②} 共産党史をめぐるこうした空気の変化を反映する史料の発掘や研究の動向を、おもに日本語文献を中心に試みよう。

プランゲ文庫、水野津太史料

第二次大戦後に日本を占領した連合軍の総司令部（GHQ）は、その民間検閲局（CCD）のもと、一九四五年秋から一九四九年一月まで、いわゆるプレスコードと呼ばれるメディア規制と検閲を行った。その結果として、CCDには提出された膨大な出版物が蓄積された。教授としてアメリカのメリーランド大学に在籍のまま、GHQ参謀本部Ⅱ部戦史室に勤務していたプランゲ博士は、これらの出版物の歴史史料としての重要性を認識し、一九五〇年より二年間にわたって、これらを勤務校のメリーランド大学に運び込んだ。

劣化の激しいこれらの出版物のマイクロフィルム化マイクロフィッシュ化は、一九八〇年代より作業が開始され、二〇〇一年には雑誌類約一万四〇〇〇タイトル、二〇〇四年には新聞類約一万八〇〇〇タイトルが市販されるようになった。その販売にあたっては地方別・分野別の分売方式が発売元で積極的にとられているようで、日本での発売元のひとつである文生書院が抽出・作成した日本共産党関連紙は八四六タイトルがあげられている。中央機関紙誌『アカハタ』『アカハタニュース』『アカハタウィークリー』のほか『京都のハタ』『北信戦線』『関東週報』『九州戦線』といった都道府県、ないし地方委員会単位のもの、そして圧倒的多数の細胞（共産党の基礎組織）機関紙が含まれる。とりわけ細胞機関紙は、まともに保存しているところがほとんどないという実情のために貴重である。目録だけでも、敗戦直後の地域や職場での党組織の分布をうかがうことができる。^③

プランゲ文庫史料のもう一つの特徴は、提出されたものが検閲のためであり、このために公刊前のゲラ刷りの段階のものが多く含まれていることである。私はまだまったく部分的にしか見ていないが、たとえば中央機関紙『アカハタ』のゲ

ラに対して、修正や削除要求がどのようになされたか、実際刊行されたものとの相違を検証することが可能になるものと思われる。

水野津太旧蔵資料も、戦後初期の日本共産党に関連する大きな資料群であり、二〇〇四年に慶應義塾大学などに搬入され、公開を準備中と聞く。水野津太（一八九三—一九九二）は、一九二〇年代に満鉄図書館に勤務し、一九三〇年代の東京では国領五一郎ら獄中の共産党員の救援運動に関わった。敗戦後、図書館司書の経験を買われて東京代々木の日本共産党本部資料室に勤務し、また渡部義通らが党の要請で組織した党史委員会の実務を担当したが、六全協後の党への違和感と不満から共産党を離れた。この間、一九五〇年に占領軍による直接の弾圧が日本共産党に加えられたとき、党史資料室の史料のかなりが水野の自宅に疎開された。水野が共産党を離れたのちの一九五七年と一九六七年に、日本共産党はその大多数の図書を回収した。その際に回収目録に記載されず、もともと水野の私物であった梱包物につき、晩年の水野の身の回りの世話役でもあった由井格らがあらためて調査したところ、次のようなものが含まれていた。すなわち『赤旗』や戦後の『アカハタ』創刊号以降約一〇年間の、良好な保存状態のバックナンバー、記事索引製作のために作成したと思われる『アカハタ』記事切り抜きファイル、日本共産党が発行したかなりの定期刊行物、中央と地方組織との通達や報告などの往復文書、地方委員会や細胞の機関紙などであった。さきのプランゲ文庫史料が、おおむね一九四〇年代いっぱい④の時期のものを対象としていたのに対して、水野資料は、一九五〇年代のものがむしろ中心である。

日本共産党本部にある党史資料室と伝えられているものが、党外に対して（そして大部分の党内にさえ）公開というにはほど遠い実情にあるとき、関連する史料の一部が当時在職していた勤務員の私物として残り、研究機関に寄託されたことは、歴史史料の共有と公開からすればまことに僥倖であったといふべきであろう。④

社会運動家の自伝・追想録

戦前の活動歴のある運動家のOB・OGたちの「旧友会」と呼ばれる組織はかなりの数にのぼり、そのうちのいくつかは会報を発行し、歴史の証言を意識的に残す活動に取り組んできたことは、前著『一九三〇年代日本共産党史論』序章（二五ページ以下）で述べたとおりである。そしてその主要メンバーの逝去によって、おおよそ一九八〇年代いっぱいでの活動を停止したものが多い。^⑤一九九〇年代以降に、若い研究者による継承は見られない。

旧友会のような組織だった活動は、戦後の時期に移ってもよさそうだが、レッドパージの被災分者たちの、記録を残す一連の動きなどが目立つものの、戦後の運動史の記録運動は活発とはいえない。^⑥京大天皇事件や砂川闘争の五〇周年にあたり、記念の集会の記録や記念出版などがなされたが、戦後についてはなお部分的といえる。^⑦しかし個人的な作業の性格がより強い自伝や回顧録・追想録については、この間も多くの作品が生み出された。

これらの一冊として牧原憲夫編『山代巴獄中手記書簡集——模索の軌跡』（平凡社、二〇〇三年）を取り上げてみよう。共産主義者の獄中書簡集は少なくない。その幾冊かは戦後のある時期にはベストセラーに数えられたものもある。『愛情はふる星のごとくに』（尾崎秀実、初版一九四六年）、『愛と思想と人間と』（グラムシ、一九六二年）といった、今から思えばずいぶん情緒的なタイトルが付されていた。とりわけ宮本顕治・百合子の往復書簡『十二年の手紙』（初版一九五〇年、五年）は、書簡集ではないが徳田球一・志賀義雄『獄中十八年』（時事通信社、一九四七年）とならぶ、戦後の日本共産党の精神的権威のよりどころを示すものとなった。その権威の源泉とは「非転向」を貫いたことではあるまい。それから半世紀以上が経過した二一世紀の今日において出版された山代書簡集のサブタイトルは「模索の軌跡」とある。確固たる北斗星のような「非転向」の貫徹を称揚する姿勢とはずいぶん様相が違う。本書の主要内容は獄中書簡だが、それに先だった第一部に山代巴の「上申書」がおかれたことも象徴的だ。巴が在獄していた三次刑務所の所長宛上申書は、

所長が巴の仮釈放を表現するために必要なものとして求めたものである。保護観察所長との面接が、夫である山代吉宗への「転向」誘導となることをおそれた巴の意向を配慮し、かつ山代夫妻の人間愛に感ずることのあった所長が、彼らに心を寄せたゆえのものであった。転向の証明としか評価されなかった「上申書」は、これまで共産主義者を自認するものにとつてはネガティブものとしか評価されず、告発材料として以外に日の目を見ることは少なかったものである。第二部「書簡」では、夫妻の往復書簡のほかに、全体の三分の一はその家族からのものである。共産主義者の獄中書簡集の基本トーンが「節を曲げない」非転向の姿勢の賞揚から、「人間愛」「家族愛」に移ったかに見える。

一九五〇年代の共産主義運動についての当時の関係者による本格的な回顧録が出た。脇田憲一『朝鮮戦争と吹田・枚方事件』（明石書店、二〇〇四年）である。一九五〇年代前半の日本共産党の活動については、中央委員会が分裂状態となり、そのときの主流派とはいえない部分が一九五六年の六全協による再統一以後の共産党を主導したという経緯が、一九五〇年代の武力闘争方針の時期の関係者の証言を困難にしていた。大窪敏三『まっ直ぐ』（南風社、一九九九年）は、この点で先駆的であった。戦前は中国戦線の前線で、戦後は日本共産党の戦列において、いずれもノンキャリアのミリタント（戦士）として、つまり一兵卒として活動した大窪は、敗戦や六全協といった、それまでの自己を突き動かしてきた基本理念が大転換したときに露呈する同志たちの身の処し方を描きつつ、思想の内容ではなくてその質のあり方を問う。自身の属する新しい党指導部によって完全に否定された「武装闘争方針」という活動歴を持つ黨員の身の処し方を知るうえでも興味深い。脇田憲一氏は一七歳の高校生の時に、共産党の武装闘争の一環として企てられた枚方の軍需工場への攻撃闘争と、朝鮮戦争への軍用列車妨害のための陽動作戦などに参加して検挙され、保釈後、奥吉野、大阪などで山村工作隊や基地工作活動にかかわる。六全協後、共産党を離れ、労働組合運動に参加、総評のオルグとなる。本文七七〇ページ、それに伊藤晃氏の解説論文などを付す。のち共産党の主流から否定され、なかったこととされている歴史の体験者が、自らの情熱と体験を歴史化するというのはいかに自問し、半世紀ぶりの再調査に乗り出す。本書は回顧録と言うよりは、

過去を追体験する検証の旅の記録という趣がある。戦後の左翼運動史の空白も、ようやく歴史化されてきたとの感を抱かせる書である。

しかし川口孝夫『流されて蜀の国へ』（私家版、一九九八年）を読むと、この時期を歴史として叙述することの困難さをなお強く感じる。かの一九五二年の白鳥警部殺害事件当時に札幌地区の中核自衛隊の責任者として「知りすぎた男」であった著者は、六全協後の統一指導部の手によって、口封じのためにか、だまし討ち的に中国奥地への島流しならぬ「陸流し」にあう。彼が一七年もの中国での生活を終えて帰国できたのは、日中両共産党が断絶状態となり、かつ日中国交が回復した後の一九七三年のことであった。伊藤律と類似の運命をたどった著者は、革命党の、組織第一の論理の持つ非情さを自身の姿に写す。しかし著者はこの本でも、白鳥事件の真相については曖昧にしている。事件から五〇年以上が経過し、中国に亡命した、事件関係者とされる共産党員の幾名も、すでに多くは客死した。その中で、白鳥事件が権力による謀略であり、共産党は無関係であるの立場で書かれた代表作といふべき山田清二郎『白鳥事件研究』（白石書店、一九七七年）が文庫化されるにあたり、事件の共同被告であった元共産党員高安知彦の長文の証言を収録した和多田進の一〇〇ページもの「解説」は、実行為者の特定を含む共産党員による犯行を述べるものであった（新風社文庫、二〇〇五年）。しかし下山事件が、関係者の証言をつなぐだけでは真相に迫れなかったのと同様に、白鳥事件も証言を裏付ける実証が必要となる。刑事手続きとしてでなく、歴史研究としての究明のあり方が問われる。この点で佐藤一らによる『下山事件全研究』（時事通信社、一九七六年）の先駆例を思い起こすべきであろう。

一九五〇年代末より登場した「新左翼」と呼ばれていた流れの関係者の回顧録も登場し始めた。比較的若くに亡くなったリーダーである生田浩二、唐牛健太郎、高瀬泰治らへの追想録や、本多延嘉、中原一、西京司といった各派の最高リーダーたちの論集はすでに世に出ているが、近年で特記すべきはブンド（共産主義者同盟）創設の中心人物で二〇〇〇年に逝去した島成郎に関連するものであろう。島成郎は生前に『ブンド私史』（批評社、一九九九年）を著していたが、島成郎記

念文集刊行会『島成郎と六〇年安保の時代』全三巻（情況出版、二〇〇二年）はその島の追悼文集である。この追悼集の執筆者の多彩さこそが島の持ち味だったのだろう。一致ではなく違いを見つけることに熱心だった新左翼の中で、島のキャラクターは貴重であり、そして残念ながら例外だった。

このほかの新左翼関係者の文献のいくつかをあげる。さらぎ徳治『我かく闘えり——破防法闘争三二年——』（情況出版、二〇〇一年）は一九六九年の破防法裁判被告である著者が、公判中の長きにわたって逃亡したあとの復活の書であり、破防法裁判記録集である。浅田光輝『激動の時代とともに』（情況出版、二〇〇〇年）は、新左翼にシンパシーを抱いた元共産党員知識人の回想録であり、荒畑寒村らに比べれば、その愛憎の起伏は緩やかだ。三上治『一九六〇年代論』『一九七〇年代論』（批評社、二〇〇〇年～二〇〇四年）、荒岱介『破天荒伝』（太田出版、二〇〇一年）、塩見孝也『赤軍派始末記』（彩流社、二〇〇三年）、小野田襄一『革命的左翼という擬制』（白順社、二〇〇三年）といった一九六〇年代の学生運動指導者も六〇歳代となって、こうした回顧録をしたため始めた。しかし「よど号」関係者についての『回想 田宮高磨』（紫翠館出版、一九九七年）などを読むと、まだ歴史の濾過を経た客観性を帯びるにはほど遠いものである。^⑩

新左翼の党派の他に、それらと一部は呼応しながら独自の運動の論理を構築していった人々のもの、古くは飯沼二郎『私のあゆんだ現代』（日本基督教団出版局、一九八三年）などがあるが、この間には小田実『ベ平連』・回顧録でない回顧（第三書館、一九九五年）、『瓢鰻まんだら 追悼前田俊彦』（農文協、一九九四年）、小林トミ『声なき声』をきけ』（同時代社、二〇〇三年）、あるいは三里塚空港反対同盟の活動家の追想録『石井武の生涯』（七つ森書館、二〇〇四年）などが登場した。

復刻版の刊行

機関紙誌の復刻情況は一時ほどには隆盛をみない。「前進」「戦旗」「世界革命」「現代革命」など新左翼主要党派の機関

紙は縮刷版を刊行したが、いずれも一九八〇年代になってから、継続刊行を果たしていない。『ベ平連ニュース』復刻版（一九七四年）に続き、京都ベ平連機関紙『ベトナム通信』の復刻（不二出版、一九九〇年）など、あるいは救援連絡センター『救援』縮刷版（一九七七年、八三年）など党派以外のグループの元活動家たちによる復刊事業がむしろ散見される。大原社会問題研究所の『日本社会運動史料』の復刻は、一九六九年の新人会機関紙の刊行以来三〇〇冊を数える大事業であったが、予告された全タイトルのいくつかが残されたままであり、この継続事業である『戦後社会運動史料』も『東京民報』『民主評論』『社会思潮』などを刊行したのみで中断している。一冊あたり一〇万円にもぼる定価が付されるところをみると、この種の復刻事業は商業出版として成立しない現状が推察される。一九七〇年代までの、戦前の運動関係機関紙誌の活発な復刻情況と比較するに雲泥の相違である（田中前著、五二～五四ページ）。

官 憲 史 料

この間の、社会運動を取り締まる官憲側の史料の登場の圧巻は、荻野富士夫が単独で編集した『特高警察関係資料集成』第一期全三〇巻（不二出版、一九九一～一九九四年）、同第二期全八巻（二〇〇四年）である。すでに一九七〇～八〇年代において内務省『社会運動の状況』『特高月報』、司法省『思想研究資料』『思想月報』、文部省『思想調査資料』など基本的なものの復刻は終わっていた（田中前著、二〇～三三ページ）。先の復刻では未発見のために収録されていなかった『社会運動の状況』一九二六～二七年版や『外事月報』『外事警察報』などの補遺が、荻野のこの資料集に加わった。

荻野編のこの資料集の特徴は、これまでに復刻がなされたものの多くが、定期的に印刷に付されたものが多かったのに対して、個別的な文書を集積したものを中心としており、その所蔵機関も多様であることである。少数数の謄写刷りのものがかなり含まれ、警保局の部内資料と思われるものもある。山岡万之助関係文書（日本大学法学部図書館、学習院大学法経図書室）、大野緑一郎関係文書（国立国会図書館憲政資料室）をはじめ、有松英義、松本学、額綱弥三などの内務官

僚の旧蔵していたもの、さまざまな機関に所蔵されている旧内務省関係の諸文書や、占領軍が接収した「米軍没収資料」、「旧陸海軍省文書」マイクロフィルムなどを丹念に拾い直し、第一期の三〇巻では計二六五点の資料を一二のテーマに分けて収録されている。なお一九二〇年代の上記官憲資料の補遺というべき、内閣書記官室、あるいは警視総監室旧蔵文書が、廣畑研二の解説を付してマイクロフィルム版で発売された(不二出版、二〇〇三年)。

占領軍が押収した旧内務省文書のいくつかは、早くは『資料日本現代史』の「敗戦直後の政治と社会」(大月書店、一九八〇―八一年)などに収められていたが、さらに「敗戦時全国治安情報」(日本図書センター、一九九四年)、あるいは「太平洋戦争内務省治安対策情報」(同、一九九五年)との統括タイトルが付されて刊行された。アメリカ国立公文書館所蔵の極東国際軍事裁判国際検察局文書のうちから重要度の高いものを抽出したとされている。

戦前の日本共産党主要メンバーの、治安維持法違反事件等における予審調書、予審集結決定書は、一九八〇年代までには容易に刊本で見ることが可能になっていた(田中前著、二二―二三ページ)。その後も『中西功訊問調書』(亜紀書房、一九九六年)、『野坂参三予審尋問調書』(五月書房、二〇〇一年)がでた。珍しいところでは『松本三益団規令事件公判記録』(あゆみ出版、一九九一年)がある。破壊活動防止法の前身ともいうべき団体等規制令の違反事件公判は公判事例自体が少ないものである。

この間に刊行された調書、公判記録の圧巻はなんといっても『山本正美 裁判関係記録・論文集』(新泉社、一九九八年)、『山本正美 治安維持法裁判陳述集』(同、二〇〇五年)であろう。山本正美は、コミンテルンが作成した戦前の日本共産党の綱領的文書の筆頭である「三三二テーゼ」の作成に関わったただ一人に日本人であったことで知られる。本書に収められた山本の予審調書、獄中手記、裁判の法廷での陳述は、三三二テーゼの内容と本質を解説し、その有効性を力説し、誤った解釈を排除するという使命に満ちている。戦後かなりの時間を経た時点での山本の回想記『激動の時代に生きて』(マルジュ社、一九八五年)は、山本の戦前のこの使命感そのままに、三三二テーゼのもっともよき祖述者としてみずからを位置

づけてゐる。

① 一九五〇年六月、日本共産党中央機関紙「アカハタ」が占領革命令で無期限発行停止を受けたあとと半非法後継紙であった「平和と独立」が、一九九九年に復刻されたさい、発行所の五月書房は日本共産党中央委員会にその許諾を求めようとした。しかし現在の日本共産党は、一九五〇年代前半の時期の、いわゆる徳田主流派による「臨時中央指導部」や、そのもとの「四全協」「五全協」の決定を、分裂した一方の側が勝手したもので、日本共産党としての活動ではなく、閑知しないとの立場をとっている。したがって五月書房の復刻版出版事業について、許諾を与える立場にないとの回答であったという。この点から見ると、今回の『戦後初期沖縄解放運動資料集』に対する日本共産党中央委員会の対応は、みずからが、いわゆる「共産党五〇年分裂」時代の、いずれの側についても歴史的責任を負う継承者という、まっとうな立場に立っていく萌芽といえなくもない。

中村智子『百合子めぐり』（未來社、一九九八年）は、かつて中村の旧著『宮本百合子』（筑摩書房、一九七三年）に対して、日本共産党がその神聖な神殿に土足で上がり込まれて探索されたようなナーバスな対応を示したことなどを回顧した部分があるが、こうした現象も昔語りとなりつつある。

② 日本共産党中央機関紙「アカハタ」（一九六六年二月より「赤旗」、一九九七年四月より「しんぶん赤旗」と改題）も、一九四五年から二〇〇〇年にいたる時期のものが、マイクロフィルムによる復刻版として発売されるようになった（極東書店、二〇〇四年）。同紙は一九六一年以降は日本共産党出版局から縮刷版が発行されており、おにも東京周辺で配布された最終版と、日曜版が収められている（二〇〇四年より縮刷版の発行を停止し、CD-ROM版を販売してゐる）。しかし

縮刷版発行以前の、敗戦直後から約一五年間の「アカハタ」を揃えて所蔵する機関は皆無であった。部分的に所蔵している研究機関などを経巡り、劣化の激しいバックナンバーを閲覧することは容易な作業ではなかったが、日本共産党中央機関紙閲覧の条件は大きく変化したわけである。

③ プランゲ文庫の記事索引として、山本武利らの二〇世紀メディア研究所が科学研究費の交付を受けて構築した「占領期雑誌記事情報データベース」<http://www.plangeb.jp>が有用である。二〇〇三年三月末現在で、雑誌タイトル数七三六七、記事レコード数一二六万九五七九が入力されている。

④ なお水野津太の波乱の生涯については、由井格・由井りょう子編著『革命に生きる——水野津太 時代の証言』（五月書房、二〇〇五年）がある。

⑤ 戦前の運動歴を有する元左翼活動家たちが中心となった運動史の情報誌として前著で取り上げたものうち、二〇〇五年現在でなお継続しているものは、京都の民主運動史を語る会編『療原』くらいで、二〇〇六年一月現在第一二二号を数える。その内容と書き手も当然のことながら新しい時期に入っている。

⑥ レッドパージ対象者たちの証言を中心とした編纂物として『一九五〇年七月二八日・朝日新聞社のレッドパージ証言録』（晩聲社、一九八一年）が早期のものだが、その後に、『聞書・電産の群像・電産十月闘争・レッドパージ・電産五二年争議』（平原社、一九九二年）、『検証レッド・パージ・電力産業労働者の闘いと証言』（光陽出版社、一九九五年）、『源流・レッドパージ五〇年のたまたかい：二二世紀への継承』（光陽出版社、二〇〇〇年）『回想・尼崎のレッド・パージ』

（耕文社、二〇〇二年）などが登場し、三宅明正『レッド・パージとは何か…日本占領の影』（大月書店、一九九四年）、平田哲夫『レッド・パージの史的究明』（新日本出版社、二〇〇二年）といった研究書も出現した。その他、敗戦直後の労働運動についての共産党関係者の証言録としては、すでに増山太助、松本健二、鈴木市蔵、伊井弥四郎、長谷川浩らの回想記が刊行されていたが、最近では、宮本太郎『回想の読売争議——あるジャーナリストの人生』（新日本出版社、一九九四年）、宮森繁『東宝争議追想』（光陽出版社、二〇〇二年）などが加わった。『女工哀史』をぬりかえた織姫たち（光陽出版社、一九九九年）といった運動の語り部記録運動も、一時期ほど活発とはいえない。

なお大原社会問題研究所編『証言 産別会議の運動』（お茶の水書房、二〇〇〇年）、同『証言 占領期の左翼メディア』（御茶の水書房、二〇〇五年）は吉田健二らの努力による貴重なオラルヒストリーの集積である。

⑦ 京大天皇事件五〇周年を記念する集会在、二〇〇一年一月二二日に京都で開催され、その『記録集』が印刷された（二〇〇二年刊）。この事件では退学などの処分が出ていたにも拘わらず、その救援運動はほとんど組織されず、事件関係者がこのように一同に集う機会は五〇年の間なかったとある。一九五〇年代前半期の日本共産党京大細胞関係者が寡黙であるのに対して、早稲田一九五〇年記録の会（早稲田一九五〇年 史料と証言）（全五号、一九九七—一九九九年）、東京大学学生細胞関係者による『一九九文文集』（全六集、一九九七—二〇〇三年）あるいは『私の女高師 私のお茶六』（二〇〇四年）など、当時の学生運動と学生党活動の証言を積極的に残す努力が、その五〇周年前後に当事者たちによって取り組まれた。また砂川闘争五〇周年を記念して、砂川闘争に参加した人々の回想記集『砂川闘争五〇年

それぞれの思い』（けやき出版、二〇〇五年）が刊行され、富岡政雄『砂川闘争の記録』（御茶の水書房、二〇〇五年）が復刊された。

⑧ 最近一〇年間での、戦前期の活動歴を有する者に関係する出版は岩井会編『岩井弼次——七五年の足跡——』（創生社、二〇〇一年）、横井陽一編『横井兎夫の生涯』（同時代社、二〇〇二年）、中西三洋『治安維持法下の青春』（光陽出版社、二〇〇二年）、永山正昭『星星之火』（みすず書房、二〇〇三年）、『治安維持法下に生きて——高沖陽造の証言』（影書房、二〇〇三年）など、かなり限定的なものになっているのは避けられない。共産党関係者以外においても柳橋小虎『小虎が駆ける』（毎日新聞社、一九九九年）などが刊行されたことを例示しておく。

⑨ 戦後の共産党員としての活動歴を有する人々の回顧録も相当の数に上るが、松江澄『広島の原点へ——自分史としての戦後五〇年』（社会評論社、一九九五年）など、本人自身が書き残した自伝・回顧録よりも、本人の逝去のちに親しい同志たちによって編纂される遺稿集と追悼文集を兼ねた出版物がむしろ目立つ。そのなかで『追悼 春日庄次郎』（一九七六年）や『内藤知周著作集』（亜紀書房、一九七七年）に続き、小森春雄『共産主義運動の原点』（ウニタ書館、一九八六年）、野田弥三郎『自伝 マルクス主義六〇年』と『野田弥三郎著作集』（小川町企画、一九八八年）、『片山さとし遺稿集』（同編纂委員会、一九九五年）、『柳茂次——著作・回想』（社会評論社、二〇〇二年）などは、元日本共産党幹部で一九六〇年代初期に日本共産党を離れた人々であるが、今読み返してみると、党と社会主義体制の絶対視など、彼らが批判した党主流の発想に驚くほど近いことをしばしば感じさせる。

⑩ 島成郎は逝去の直前、高沢晴司らの協力を得て資料集『ブンド（共産主義者同盟）の思想』全七巻、別巻一（批評社、一九九九年）を刊

行した。新左翼系党派の資料集はこれまでも『赤軍』ドキュメン
ト…戦闘の向示録（増補版）』（新泉社、一九七八年）などいくつかを

数えるが、史的検討を加えた体系だった資料集には、なお距離がある
と感ぜられる。

おわりに

関連する資料があまねく公開され、共有化される状態にあることが「歴史化」の基礎条件であるとすれば、日本の共産主義運動史も、この一〇年間、確実に「歴史化」の過程を進んできた。さまざまな運動体の機関紙誌類の系統的集積、関係者の記録や回想、戦前期が主ではあるが、取り締まり側の記録の大まかな全容の共有化、政治的タブーの消失や体制の崩壊による秘匿資料の公開、こうした条件が飛躍的に伸張した最近の一〇年であったことをスケッチしてみた。

二〇世紀の達成物について論じるにさいして、社会民主党宣言から日本国憲法へと問題をたてることは、政治的民主主義の伸張を尺度にしようという指向性があると思われる。しかしながら日本に社会主義思想が導入されるにさいしては、それはまず「経済」の思想として受容された。

安部磯雄の起草といわれる「社会民主党の宣言」（『労働世界』第七九号、一九〇一年五月二〇日号に掲載）は「如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは実に二十世紀に於けるの大問題なり」との書き出しで始まり、一八世紀末のフランス思想を中心に伝播した自由民権の思想は政治上の平等主義をもたらすうえで大きな役割を果たしたが、一九世紀の資本主義の発展と物質的進歩のなかで貧富の格差という新たな問題を生じたことを述べ、二〇世紀を迎えた当面の課題を端的に「経済上の平等は本にして政治上の平等は末なり」と断じた。「立憲の政治を行ひて政権を公平に分配したりとするも、経済上の不公平にして除去せられざる限りは人民多数の不幸は依然として存すべし、是れ我党が政治問題を解するに当り全力を經濟問題に傾注する所以なり」、すなわち政治上の平等から、さらに経済上の平等の追求が二〇世紀において前面に登場している課題であり、その処方箋こそが社会主義であるという立場である。

つまり、社会主義の思想が政治の次元ではなく、経済の次元の問題であることを強調している。この「宣言」の三カ月前に公刊された安部磯雄の『社会問題解釈法』（一九〇一年二月）は、もっぱら貧困問題に対する改良方策についてのいくつかの章のあと、資本主義経済組織の「根本的改革」としての社会主義に関する最終章があり、民主主義や平和主義・帝国主義に関わる記述がない。つまり政治的変革の主張は、この書においては回避されている。

『社会問題解釈法』のこうした自己限定的内容からすれば、同じく安部が起草したとされる「社会民主党宣言」が平和主義や民主主義の主張に言及しているのはいささか唐突である。「我党は社会主義を経とし、民主主義を緯として其の旗幟を明白にせり」との著名な一句は、社会民主党の理想綱領八項と、「実際の運動」の綱領二十八項を列挙したあと、これらを総括的に説明する言葉として登場する。その「実際の綱領」には貴族院廃止・治安警察法の廃止・軍備の縮小・普選選挙法の実施・労働組合法の制定と団結権の保障・小作人保護法の保障などのおもに政治課題を列挙した。

二〇世紀初頭のこの時期、社会主義は国営・ないし公営本位主義であることが主要な特徴として説明され、それは個人主義・利己主義として理解された資本主義の対概念とされた。あるいは弱肉強食主義の資本主義に対して、相互扶助の思想として社会主義は説かれた。資本主義の矛盾に対する処方箋として、建設的な主張が社会主義と考えられた。その主張が「経済」の次元にとどまる限り。

安部磯雄と親しかったキリスト教社会事業家の石井十次は、一八九〇年代の初期には、安部を通じてイギリスの社会主義者ヘンリー・ジョージの著書を読み、みずから「社会党」のための運動を構想する。しかしそれから一〇年以上を経た日露戦後において、石井は、「社会防衛論」の立場から慈善の必要を説き、社会主義と革命に敵対していく。同じようなことは山室軍平や留岡幸助にもあてはまらう。安部らが同志社でラーネッドから受けた「貧困」の経済学は、慈善事業の効用を説いた。さらに安部は応急的処置としての慈善事業と、根本的改革としての社会主義の併存を『社会問題解釈法』で行った。しかし日露戦後において山口孤剣や山川均といった新しい世代の社会主義活動家たちは、慈善事業で貧民の救

済は不可能であり、慈善事業は資本家の延命策、すなわち革命を起こさないための反動的政策であるとの主張を強く打ち出していく。社会主義と社会事業は大きく乖離し、その併存を模索した安部は、運動の第一戦から退いて早稲田の教員としての職務のなかに専念し、社会主義の政治運動家としてはしばらく身を引いた形となる。

きわめて図式的な説明をすれば、日露非戦論の提唱を境に、初期社会主義のよって立つ基盤は、「経済」から「政治」へ、経済変革から反戦平和へと力点を移した。それがかれらの社会的位置を大きく変えることとなった。片山潜らの「議会政策」派はそれでも日露戦争前のオーソドックスな、体制調和を指向する社会主義像を維持したが、新たに登場した社会主義の新世代の担い手たち（山川、荒畑、大杉ら）にとつて片山は、すでに反発の対象でしかなかった。

その片山潜の第二次大戦後の論文集に『反戦平和のために』と題されたものがある（国民文庫、一九五四年）。原著は一九三五年にモスクワで発行されたものである。コミンテルン執行委員としての片山の一九二〇年代から三〇年代前半にかけての「反戦平和」にかかわる論文や演説を集めたものである。片山は、日露戦争中にアムステルダムの万国社会党大会でロシアの社会主義者ブレハーノフと壇上での握手という見せ場を演じたことで著名な人物であり、いわば社会主義者の「反戦」の象徴視された人物である。そのイメージが第二次大戦後の片山の論文集のタイトルにも反映されたものといえよう。

しかしながら日露戦争当時の「非戦論」と、コミンテルンの「反帝平和運動」は似て非なるものである。コミンテルンは多くの平和運動を、革命的状态への成熟を妨害する「絶対平和主義」として排除し、攻撃した。『反戦平和のために』に収められた論文発表の時期における片山が依拠せざるを得なかった視点からすれば、トルストイをも担ぎ出した日露戦争期の日本の社会主義者の非戦論は、絶対平和主義以外のものではなかったはずだが、もちろん片山がその比較説明をなし得るはずがない。

日露非戦論は、それ以前の初期社会主義の脈絡からも、あるいはのちのコミンテルン型の「平和運動」からも、異質の

要素を持っている。「社会主義」の歴史のなかでは、それが「反戦」と結びつくのは、両者がともに「反体制」的要素を帯びるときである。それはある種の政治力学のなせるわざではあっても、経済変革の理論としての社会主義論が必然的に反戦・非戦の論理をもたらすものではない。平民社と『平民新聞』の百年を記念することの意味は、「非戦論」の主張においてというよりも、そのことによる社会主義運動が体制と対決する運動となったことにおいてであろう。

民主主義、平和主義、そして「経済的平等」の思想としての社会主義。近代社会が生み出し、指向し、政治体制として実現しようとしたこれらの指標の歴史的達成を一つ一つ吟味するという作業の中に「二〇世紀の社会主義」の歴史的相対化作業がある。

was the switch to an interpretation revolving around the “mutual complementary nature of the Empire and its territories” in the second variation that was G. Schmidt’s *komplementäre Reichs-Staat*, which was an outgrowth of his “political system.”

Through an introduction and investigation of the controversy over the work of G. Schmidt, this article aims to explore the image of early modern Germany and that of Europe that is appropriate at a time when the future of globalization is in question.

What were the Achievements of Socialism in the 20th Century? :
Trends in Research on the History of the Communist Movement
in Japan in the Last Decade

by

TANAKA Masato

The demise of socialism in the form of political regimes has broken old political taboos, and made hitherto sealed documents available to the public. As a result, we have come to the point where we are now able to ‘historicize’ the Communist movement. The twentieth century was widely understood as a ‘century of wars and revolutions’ that constituted a part of larger transitional process from capitalism to socialism. However, as socialism is being ‘historicized’, new perspectives towards the twentieth century and its achievements have emerged.

The view that understands the Declaration of Social Democratic Party (1901) as an origin of the Japanese Constitution (1947) emphasizes contributions of socialism to the advancement of ‘political’ democracy in Japan. On the other hand, many Japanese accepted socialism primarily as a set of economic rather than political ideas. In this context, socialism was considered as an agent that would bring about ‘economic’ democracy that the Japanese bourgeois revolution had failed to attain.

Socialism as a body of thought will allow a still wider array of reinterpretation. It may also be re-evaluated as an offspring of modernity along with other values such as ‘freedom, equality, and fraternity’. The way and extent to which socialism was associated with other social thoughts such as democracy and pacifism should also present a profitable field of research that has not yet been sufficiently cultivated.